

観光を通じて顕在化される景観

— スペイン・パナデスにおけるブドウ畑の景観を活かした観光の取組 —

Tourism as a Process of Raising-Awareness on Landscape

— Three Experiences of Tourism on Vineyard Landscape in Penedès (Catalonia), Spain —

齊 藤 由 香

Yuka SAITO

I. はじめに

近年、日本の国内外において、景観概念のとらえ方や景観に対する関心の変化を背景に、景観政策の決定過程における市民参加の重要性が指摘されている。たとえばヨーロッパでは、従来の景観政策において、自然景勝地や歴史文化遺産など、特別な価値が認められた場所の景観のみが対象化されていたのに対して、2000年に成立した「ヨーロッパ景観条約」以降、ヨーロッパ全土のあらゆる景観が保全や整備の対象とされることになった（齊藤，2011a）。それは、同条約が定義するように、景観を「自然と人間の相互作用によって形成された特徴をもつ地域（*area*）」をとらえるならば、景観とは特定の場所にのみ存在するのではなく、われわれにとって身近で、どこにでも存在するはずだからである。景観概念をこのようにとらえる同条約は、「人々の生活の質の一部をなし」、「個人や社会の幸福にかかわる重要な要素」である景観を、保護・管理・整備することは「すべての市民にとっての権利であり、責務である」と謳い、景観政策の策定や実施における市民参加の必要性を強調している（Council of Europe, 2000）。

日本においても同様に、景観に関する施策の変遷をみると、歴史的・審美的価値が評価された特別な町並みから、ふつうのまちの景観へと関心が移っている（小浦，2008）。制度上の景観保全が開始された1960年代はいわゆる「歴史的町並み」に関心が集まり、伝統的な建築様式や古い街道などに認められた歴史性という価値を維持するために、町並みを「まもる」ことに重点が置かれた。それに対して、1970年代後半に入ると景観はまちの総合的環境としてとらえられるようになり、住民にとって心地よい生活環境を形成するために、景観を「つくる」「そだてる」という考え方が生まれた。近年では「景観まちづくり」という言葉にも表れるように、景観がまちづくりと連動するようになり、景観に関する計画やルールづくりに住民が主体的にかかわるケースもみられるようになってきている。このように、特別な景観から「ふつうの」景観にまで対象や関心が広げられたことに伴い、行政や専門家の主導による従来の景観施策に代わって、市民参加・住民主体による景観形成の意義が唱えられるようになってきている。

とはいえ、実際のところ、いくら制度や政策の上で市民参加の必要性が主張されようと

も、一部の非常に意識の高い市民をのぞき、一市民が何のきっかけもなく景観保全のために具体的なアクションを起こすことは、きわめて限られている。それは、われわれにとって普段から見慣れた日常的景観についてであれば、なおさらである。「生活景」¹⁾ともよばれる日常空間の景観は、人々の間でさほど意識化されておらず、なぜその景観が大切なのか、なぜ保全すべきなのか、認識されていないことが通常だからである。政策決定過程に市民全体を動員するのが難しいとしても、まずは住民自身が自らの土地について知り、その景観に関心や愛着をもつことが、景観形成における市民参加を促す上での最初の一步として必要なのではないか。

このように、景観の存在や価値に対する「気づき」の機会を与えること、言い換えれ

ば、景観を顕在化させる手段の1つとして今回注目したいのが、観光という行為である。観光といえば、通常は日常生活の場を離れて、「非」日常的な体験・発見をすることと定義されることが多い。しかし、近年では観光の目的や形態が多様化するなかで、観光はいわゆる「観光地」を訪れるだけではなく、まち歩きなどに代表されるように、身近な地域やまちを訪れ、その価値を（再）発見する機会としても注目されている。そこで本稿では、観光を「異」日常性を求める行為、つまり日常とは少し異なる生活文化を体験するなかで、普段見過ごしがちな地域の魅力や価値を（再）発見する「学び」のプロセスととらえることとする。そして、観光を通じて景観を体験・発見することが、身近な景観に対する人々の意識の涵養にいかにつながりうるのか

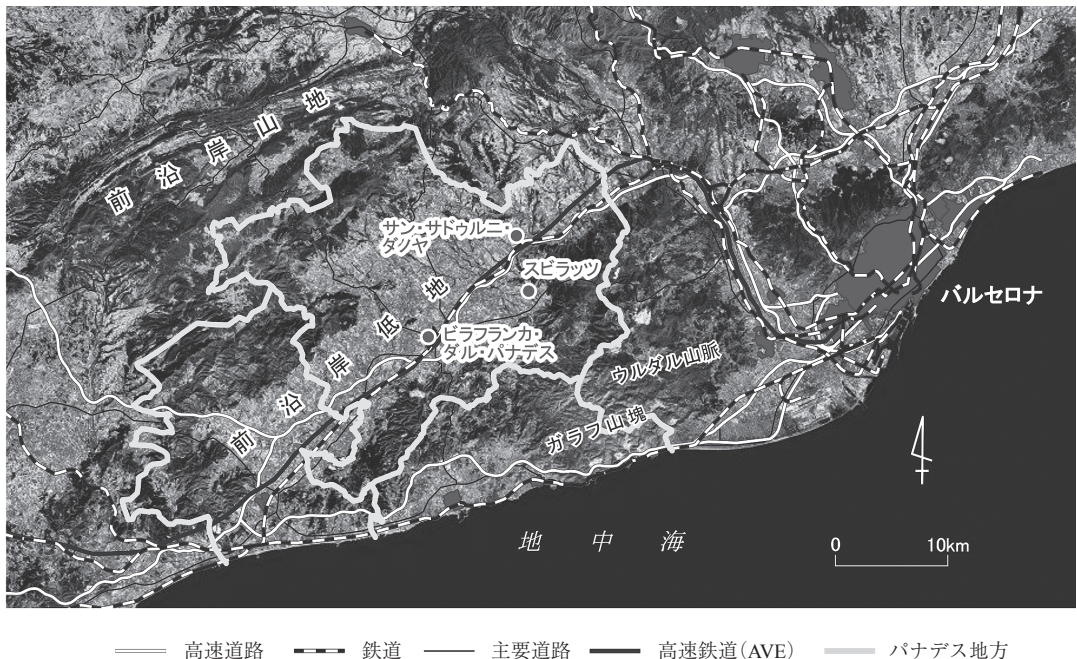


図1 対象地域（バナデス）の位置

資料：カタルーニャ地図・地質院の資料に基づき筆者作成。

を検討したい。

今回対象とするのは、スペイン・カタルーニャ自治州パナデス²⁾におけるブドウ畑の景観を活かした観光の取組である（図1）。パナデスは、スペインを代表するワインとカバ（スペイン産発泡性ワイン）の主産地として知られ³⁾、ブドウをモノカルチャーとする農業景観が広がる土地である。しかしながら、バルセロナ大都市圏への近接という地理的立地ゆえに都市化の影響は避けられず、近年その景観は大きく変貌してきた（齊藤2011b）。こうした都市化の圧力から自らの土地と景観を守るため、これまでも「アル・パナデス景観憲章」の制定（2004年）、「ブドウ畑とワインのアート・景観・エノツーリズムに関する会議」の開催（2007年～）など、景観保全に向けたさまざまな取組が行われている。またこのような運動を背景に、パナデスではブドウ畑の景観を地域資源として積極的に位置づけ、地域振興や観光推進に活用していこうとする動きもみられる（齊藤 2012）。

以下では、まずパナデスでブドウ畑の景観を活かした観光に取り組む3つの事業者を取り上げ、各々のツアーやルートの内容を分析

することで、各事業者がどのような方法で景観を顕在化しようとしているのかを把握する（Ⅱ～Ⅳ）。それらを踏まえた上で、パナデスにおける観光の取組が、景観に対する市民意識を覚醒する上でいかなる役割を果たしているのかを考察する（Ⅴ）。

本研究を行うにあたり、2012年9月と2013年9月にスペイン・パナデスの各地において現地調査を行った。調査対象としたのは、スビラッツ（Subirats）市で自転車を用いたガイドツアーを行うVicicling、ビラフランカ・ダル・パナデス（Vilafranca del Penedès）市で電動自転車によるサイクリングルートの提供を行うBurricleta、サン・サドゥルニ・ダノヤ（Sant Sadurn d'Anoia）市でワイン商を営みながらブドウ畑をめぐるハイキングを企画するCal Feruの3つの事業者である（表1）。これら3社では、担当者との間で事前にインタビュー調査を行った上で、彼らが企画・実施するツアーやイベントに実際に参加し、ルートの視察、参与観察、参加者への聞き取りなどを行った。なお、本稿にて掲載されている写真は、とくに断りのない限り、現地調査のさいに筆者が撮影したものである。

表1 パナデスにおけるブドウ畑の景観を活かした観光（対象企業3社の事例、2013）

	Vicicling	Burricleta	Cal Feru
開始年	2011年	2012年	2005年
都市名	スビラッツ	ビラフランカ・ダル・パナデス	サン・サドゥルニ・ダノヤ
事業内容	サイクリングツアーの企画・実施	電動自転車のレンタル、サイクリングルートの提供	ハイキングの企画・実施（※）
ガイドの有無	○	△	○
移動手段	自転車	電動自転車	徒歩
ルートの距離	約5km	約10km～35km	約8km
価格	35ユーロ	25～35ユーロ	12ユーロ
主な利用者	観光客 （主に国外）	観光客 （国内・国外）	地元住民 （主にカタルーニャ）

※Cal Feruの場合、主要事業内容はワインの卸小売業であり、観光ではない。

資料：聞き取り調査の結果に基づき筆者作成。

Ⅱ. Vicicling：自転車を利用したガイドツアー

Viciclingは、2011年スピラッツ市の中心集落サン・パウ・ドゥルダル（Sant Pau d' Ordal）にて、アルベルト・マサナ（Albert Massana）氏が開始した自転車によるガイドツアーを行う事業者である。

幼少の頃から自転車でスピラッツの土地を駆け回り、そのブドウ畑の風景に親しみながら育ったアルベルト氏は、いつか自分の好きなサイクリングとブドウ畑の景観を結びつけた観光ビジネスができないものかと考えていた。「ブドウ畑の都（Capital de la Vinya）」と称されるように、一帯をブドウ畑に囲まれるスピラッツにおいて、ブドウ畑の景観はたしかに町の最大の観光資源である。しかし、初めてこの土地を訪れる観光客にとって、いざ一面に広がるブドウ畑の景観を目前にして、どの地点で、何を見ることに意味があるのか、簡単には理解できない。代々ワイン醸造業に従事する家庭に育ったアルベルト氏は、スピラッツを訪れた人々にはたんにブドウ畑の風景を楽しむだけではなく、その背景にあるワインづくりの伝統文化にも触れてもらいたいとの思いから、ワイン（vi）とサイクリング（cicling）を結びつけたViciclingを立ち上げた。Viciclingとは、サイクリングを通じてパナデスの景観とワイン文化について知ることを目的としたエノツーリズム（ワインツーリズム）である。

Viciclingは現在のところ、アルベルト氏1人で運営し、自身がガイドも務めていることから、最大10名までの少人数制のサイクリングツアーを実施している。ツアーには、半日コース（3時間）と終日コース（6時間）の2種類があり、いずれのルートもViciclingのあるサン・パウ・ドゥルダルを起点として、周辺のブドウ畑をめぐるように設定されている。参加者にはワイン文化に触れてもらうた

め、サイクリングの最後には試飲も含めたワイナリー訪問を組み込んでいる。ルートは予め決まっているものの、実際には参加者と相談しつつ、体力の有無や興味・関心などのニーズに応じて臨機応変に対応している。

2012年9月に筆者が参加したのは、上述の



図2 Viciclingのサイクリングルート
丸印はスタート・ゴール地点を示す。
資料：現地調査の結果に基づき筆者作成。

半日コースである（図2）。距離は約5kmと、自転車で3時間かけて回る距離としては決して長くはないことから、じっくりと見て回るコースであることがわかる。ツアーは、アルベルト氏自身が自転車で先導し、途中立ち停まっては見えてくる景観要素の1つ1つについて、その背景やストーリーを説明する（写真1-1）。たとえば、カタルーニャのシンボルでもあるモンセラット（Montserrat）山が見えると、なぜそこに山が形成されたのか、その成因を説明すると同時に、ワイン産地としてのパナデスの自然環境についても併せて解説する。また、丘の斜面に拓かれたかつての段々畑の跡や、その中に点在するペドラ・

セカ（pedra seca）とよばれる伝統的な石組みの小屋に遭遇すれば、当時の農作業の様子や農民たちの暮らしぶりについて語る（写真1-2）。知らなければその存在に気づくこともなく、何げなく通り過ぎてしまう風景も、こうした語りが添えられることによって意味のある景観に見えてくる。

またViciclingのサイクリングツアーは、ガイドつきといえども、それがマニュアル化されたものではなく、土地をよく知るアルベルト氏によっていわば感覚的に組み立てられているところに大きな魅力がある。たとえば、今回スビラッツを訪れた9月上旬はちょうどブドウの収穫時期に当たったため、収穫中のブドウ畑に近寄って作業の様子を見学したり（写真1-3）、またこの時期が旬であるスビラッツ特産のオルダル桃（Pressec d'Ordal）を直販する青空市場（Mercat de Pressec d'Ordal）に立ち寄ってみたり（写真1-4）と、当初ルートに組み込まれていなかった場所にも訪れる機会が多々あった。つまり、一般的な観光情報や「お決まりの」解説にとどまるのではなく、その時々には彼自身が価値あると考えるもの、美しいと感じるものを来訪者にみせることで、生きた地域の姿を伝えようとしていることがわかる（写真1-5、1-6）。

このように、Viciclingのツアーは、ブドウ畑をめぐるサイクリングを通じて、たんに風景として美しいブドウ畑の景観を堪能するだけではなく、地域の生業であるブドウ栽培とワイン醸造、そしてその周辺に展開されてきた生活文化など、パナデスという土地そのものを体験できるツアーとなっている。

Ⅲ. Burricleta：GPSつき電動自転車によるサイクリング

Burricletaは、2012年7月ビラフランカ・ダル・パナデス市において開始されたGPSつき

電動自転車のレンタル事業である。オーナーのダビッド・サラ（David Sala）氏はビラフランカの出身で、若い頃から自転車でパナデスの各地を駆けめぐり、土地にも相当に精通している。サイクリングを通してパナデスの土地と景観の魅力を伝えたいとの思いから、当初、通常のレンタサイクル業を始めようと考えていたところ、出会ったのがBurricletaというプロジェクトであった。

Burricletaとは、もとよりカタルーニャ北部の町ペラフィタ（Perafita）のある二人の起業家が、人々にカタルーニャの豊かな自然環境や農村風景をサイクリングによって楽しんでもらおうと開始したエコツーリズムの事業である。ライセンス・ビジネス方式⁴⁾を取っており、ダビッド氏の運営するパナデス・ガラフセンター（Centre Penedès-Garraf）は、2015年現在スペイン国内に展開する11拠点の1つである（写真2-1）。主なサービス内容は、電動自転車であるburricleta⁵⁾のレンタル、各オーナーが独自に開発したサイクリングルートの提供、ならびにburricletaを使った各種イベントの企画である⁶⁾。ちなみに、burricletaとはburro（ロバ）とbicicleta（自転車）を組み合わせた造語である。ロバは、カタルーニャの農村社会において古くから役畜として重宝されてきた動物であり、それへの敬愛の念を込めて農村風景を走るこの電動自転車の名称に用いたのだという。自転車の後方にはかつてロバが背負っていたように、藁で編んだバケツ型の籠が備え付けられていたり（写真2-2）、サイクリングの際に着用するヘルメットも帽子風であったり（写真2-3）と、電動自転車であるburricletaが農村風景にうまく溶け込めるようにと様々な工夫が施されている。

ダビッド氏がこのBurricletaのフィロソフィーに賛同したのは、以下の2つの理由に

よるものであった。1つは、サイクリングに電動自転車を用いる点である。農村風景を楽しむさい、たしかにサイクリング（自転車）ならば、移動範囲が限られるハイキング（徒歩）に対して、地域を広く面的にみる事が可能となる。しかし、通常の自転車の場合、子供や高齢者、あるいは体力に自信のない人にとっては、長距離の走行や起伏の激しい土地での走行は必ずしも容易ではない。ましてやペダルをこぐのに必死になってしまうと、移動中の風景を楽しむことはできない。この点を解消してくれるのが、電動自転車である。電動自転車ならば、終始ペダルをこぐ必要もなく、たとえ傾斜地であってもほんの少しの労力での走行が可能である。そのため、小さな子供のいる家族連れや普段から自転車に乗り慣れていない人であっても、気軽にサイクリングを楽しむことができる。

もう1つの理由は、burricletaがGPSによるナビゲーション機能を備えている点である。比較的平坦地が多く、かつ美しい農村風景の広がるパナデスは、サイクリングに最適な土地ともいえる。にもかかわらず、通常人々がなかなかサイクリングに出かけないのは、土地や道順に精通していないからだという。そ

の点、burricletaは予め設定されたルートを組み込んだGPSを搭載しているため、利用者はそのナビゲーションに従って順路を辿ればよい（写真2-4）。たとえ土地勘のない人であっても、その都度地図を開いて自分の位置を確認する煩わしさや、道に迷う不安から解放され、周りの風景を楽しむことに集中できるのである。

ダビッド氏の経営するパナデス・ガラフセンターでは、2015年現在13のルートが設定されている（表2）。距離や難易度はルートによって様々であるが、いずれもビラフランカを起点として、湖や川などの自然公園、修道院・教会などの史跡、ワイナリーなど、町の周辺にある観光資源を目的地とした循環型のルートとなっている。これらのルートは、ダビッド氏自身が事前に綿密な踏査を行った上で設計したものであり、自動車交通の多い道路を避けたり、美しい農村風景を通り抜ける道を選定したりなど、安心して移動中の風景を楽しめるようにとの配慮がなされている。

2013年9月に筆者が体験したのは、ビラフランカに隣接する町ピロビ・ダル・パナデス（Viloví del Penedès）にあるアルス・ペラグス（Els Pèlegs）を目的地とする約30kmのルート

表2 Burricletaパナデス・ガラフセンターが提供するサイクリングルートの例（2015）

ルート	難易度	距離	所要時間
シッチャス～パラウ・ヌベリャ（仏教寺院）	中～高	22km	2～4時間
アルベティ・イ・ノヤ（ワイナリー）	中	25km	4～6時間
グルメとエノツーリズム：レストラン「カル・パドリ」での食事とワイナリー訪問	低	29km	4～6時間
サン・サバスティア・ダルス・ゴルグス修道院	低	24.5km	2～3.5時間
アルス・ペラグス・ダル・ピロビ（湖）	低	31km	3～5時間
サン・ペラ・アド・ビンクラ（かつての教会跡）	低	18km	1.5～2.5時間
ジャン・レオンのブドウ畑の散策とワイナリー訪問	極低	10km	3時間
フォシュ川渓谷での水遊び	中	34.5km	3～4.5時間
グラブアク（ビラフランカ近隣の集落）	低	17km	1.5～3時間

資料：聞き取り調査の結果に基づき筆者作成。

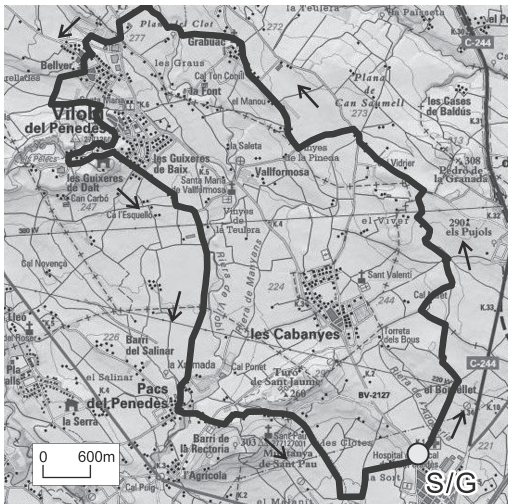


図3 Burricletaのサイクリングルート

丸印はスタート・ゴール地点を示す。

資料：現地調査の結果に基づき筆者作成。

である（図3）。アルス・ペラグスとは、古代ローマ時代に起源をもつ採石場の跡に雨水が貯まって形成された自然湖である（写真2-5）。湖の周辺には、湿潤なミクロクリマゆえに固有の生態系が生まれ、珍しい野鳥などの生息地となっている。この湖までのルートは、終始ブドウ畑の合間を縫うように設定されており、波打ったような傾斜地に広がるブドウ畑の中にマジア（伝統的農村家屋）が点在する、パナデスらしい農業景観を享受することができる（写真2-6）。実際にburricletaでのサイクリングを体験してみると、このルートがたんに目的地に辿り着くことを意図した移動ではなく、パナデスの景観そのものを満喫するために設計されていることが容易に理解できる。

Burricletaは、先のViciclingとは異なり、ガイドによる詳細な解説を伴わないものの、GPSによるナビゲーション機能のおかげで自らのペースでサイクリングを楽しめるところに特徴がある。予めルートが設定されているといえども、必ずしもそれに厳密に従う必要

はなく、たとえば少しルートから外れて寄り道をしてみたり、止まりたい場所で立ち止まってじっくりと時間をかけて見たりなど、自分なりの楽しみ方が可能である。周りのペースを気にせずに、あたかも散歩するような気楽さで景観を堪能できる点がBurricletaの大きな魅力といえよう。さらに、電動自転車であるがゆえに、通常の自転車以上に行動範囲が広がり、自分の住む土地であっても普段、街中で暮らしては知りえないような風景に遭遇することができる。ダビッド氏の言葉を借りるならば、burricletaとはまさに「景観を再発見するための手段」であり、GPSと電動自転車によって、誰もが、気軽に、景観にアクセスすることが可能となっている。

Ⅳ. Cal Feru：ブドウ畑をめぐるハイキング

Cal Feruは、1934年カバの町サン・サドルニ・ダノヤ市に創業した老舗のワイン商である。4代目となるシャビ・ロッチ（Xavi Roig）氏が経営に携わるようになってから、従来のワイン卸小売業に加えて、ワイン文化の普及活動にも積極的に取り組んでおり、近年エノツーリズムにも注力している。Cal Feruではワインや食に関する様々なセミナーやイベントを頻繁に開催しており、今回取り上げる「カバの都のブドウ畑をめぐるハイキング（Caminada per les vinyes de la capital del cava）」もその1つである。

このハイキングは、普段からCal Feruに来店する顧客をはじめ、より多くの人々にワインやカバが生まれるパナデスの土地と景観に触れてもらい、その魅力を共有したいとのアイデアから、2005年より開始されたイベントである。以後、9月上旬に開催される町の最大の祭り「フィロクセラ祭り（Festa de Filoxera）」に合わせて、毎年実施されている。

フィロキセラとは、19世紀後半にヨーロッパ全土のブドウ畑を壊滅的状況に陥れたブドウの病害虫であり、サン・サドゥルニ・ダノヤ周辺のブドウ畑も1887年その被害に見舞われた。2012年はその年から125年目に当たったため、Cal Feruのハイキングもフィロキセラ襲来125周年の記念イベントとして企画された。例年であれば、Cal Feruの店舗を出発した後、途中ワイナリー3カ所に立ち寄りながら、町の周辺のブドウ畑をめぐるルート(8.3km)を歩くところを、今回のルートはこれを逆回りして、あたかもフィロキセラが町に蔓延したプロセスを辿るように設定された。すなわち、1887年サン・サドゥルニ・ダノヤで最初にフィロキセラが発見されたという伝承が残るアスピエイス礼拝堂(Ermita d'Espiells)をスタート地点として、そこからジュベ・イ・カンパス(Juve y Camps)、ビラルナウ(Vilarnau)、ラバントス・イ・ブラン(Raventós i Blanc)の3つのワイナリーを訪ねながら、ゴール地点のCal Feruの店舗を目指して歩くことになる(図4)。

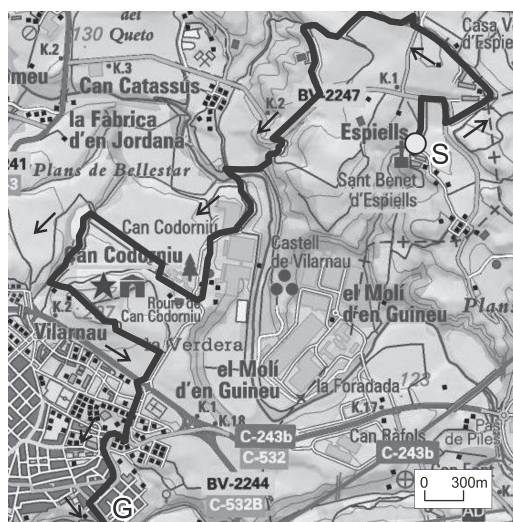


図4 Cal Feruのハイキングルート

丸印はスタート地点を示す。

資料：現地調査の結果に基づき筆者作成。

このイベントには毎年100名以上の参加者があり、今回も130名を超える応募があった(写真3-1)。そのため、今回は2つのグループに分かれ、シャビ氏と、地元でブドウ栽培業を営んでいる専門家が各々ガイドとして同行した。今回は、とくにフィロキセラをテーマとしたイベントであったため、ガイドからは冒頭にフィロキセラの生物学的特徴、伝播のプロセス、病害虫被害が地域経済に与えた影響などについて詳細な説明があった後、途中で訪問したワイナリー(ジュベ・イ・カンパス)でも、実際にブドウ畑に出て現場担当者からの専門的な解説が行われた。もともとワイン文化への関心が高く、熱心な参加者が多いため、ガイドやワイナリーの担当者からの解説に対しては次々と質問が投げかけられ、活発な議論が繰り返される(写真3-2)。こうしたインタラクティブなやりとりを通じて、その場にいる参加者全員が議論を共有し、新たな発見や知識を得る有意義な場となっている。

訪問先の各ワイナリーでは、醸造施設を見学した後、ワインやカバの試飲が用意されている。この試飲こそが、ハイキングへの参加者が最も楽しみにしているイベントである。各ワイナリーの看板商品であるカバはもちろん、その製造過程でできるモスト(原酒)を特別に振る舞うところもある。カバのモストは、通常消費者は試飲できないばかりか、1年を通じてこの時期(タイミング)にしかできない品であり、ステンレスタンクから直に抽出されたモストを堪能する参加者たちの姿があった(写真3-3)。

このハイキングへの参加者の多くが、家族や友人などのグループでの参加である。なかには1人での参加もあるが、その場合はリピーターであることが多く、毎年に参加を通じて顔見知りになった人々も少なくない。親しい

間柄の人たちとともに、収穫を控えた美しいブドウ畑を目の前に、土地について語り合い、ゆっくりと思い思いのペースで歩く（写真3-4）。このルートの途中には史跡やモニュメントなどの顕著な見どころがあるわけでないものの、普段見慣れたはずのブドウ畑の風景と改めて向き合い、家族や仲間たちとともに土地の恵みをじっくりと味わう（写真3-5, 3-6）。こうした無理のない設定こそが、このハイキングの大きな魅力といえよう。

V. おわりに

本稿では、スペイン・パナデスにおけるブドウ畑の景観を活かした観光の取組に注目し、景観の価値や魅力を人々に伝えるため、事業者たちがどのような方法で景観を顕在化しているのかを明らかにしてきた。最後に、こうした観光の取組が景観保全に対する市民意識の覚醒にいかに関与しているのかについて、前章までに取り上げた3つの事例を振り返りつつ、若干の考察を行いたい。

今回取り上げた3つの事業者は、観光としての形態が異なり、それゆえに景観の見せ方も様々ではあったものの、いくつか共通する点もみられた。1つは、3者ともが地元パナデスの出身者であり、彼ら自身がこれまで土地と密接にかかわり合うなかで見出ししてきた、景観の価値や魅力を熱心に伝えようとしている点である。ワイン産地における観光（エノツーリズム）と言え、ワイナリーをめぐる、醸造プロセスを見学し、ワインの試飲をする、といったパターンが一般的な形態としてイメージされるかもしれない。もちろん、今回取り上げた3つの事例でも、パナデスの生業であり文化でもあるワインについて伝えようと、ルートの途中にワイナリー訪問を含むことがあった。しかし、それ以上に彼らが重視していたのは、パナデスという土地

そのものを見せ、景観について語ることで、参加者とともにその価値や意味を共有するということであった。このことは、インタビュー調査のさいに彼らの語りのなかで、「*territori*（土地）」、「*paisatge*（景観）」という言葉が繰り返し強調されていたことから看取することができる。

土地に精通したインタープリター（案内人）や語り部といったガイドの重要性は、たとえばまち歩きやジオ・ツーリズムなどに代表されるような、地域資源を活かした観光（ニューツーリズム、着地型観光ともよばれる）においてもしばしば指摘されている（數田 2008, 小泉 2011など）。こうした観光において対象化されているのは、一般的な観光地であったり、特別な価値をもった場所であったりというよりは、むしろ何気ない日常の場の景観であることが多い。そうすると、初めての来訪者にとってはその土地に来て、何を、どうみたらよいのか、すぐには把握できないのが通常である。普段さほど意識化されていない、ブドウ畑という農業景観を対象としたパナデスの場合にも、地域に関する豊富な知識や経験をもったガイドの存在が景観を顕在化する上で重要な役割を果たしていた。IIのVicielingの事例でもみたように、こうした地元の人々によるガイドは、時に個人的な感覚や経験、価値観に基づいた主観的なものかもしれない。しかし、神吉（2011）も指摘するように、主観的にとらえられた価値であっても、それが来訪者たちの共感を得たとき—彼らにとって、何気ない景観が、意味のある景観に見えたとき—それが景観に対する「気づき」となり、景観保全の意識へと結びついていくのではないだろうか。

景観の顕在化という点でもう1つ注目すべきは、彼らがたんに風景として目前に見えているもの、すなわち物理的環境としてのブド

ウ畑の景観を見せるだけではなく、むしろその背後にある「見えないもの」を見せようとしている点である。先のViciclingのツアーで、モンセラット山やペドラ・セカの石垣や小屋が見えたとき、たんにその存在を伝えるのではなく、「なぜそこにあるのか」、「どのようにして形成されたのか」といった成り立ちや背景を語るのはその例である。また、IVで論じたCal Feruのハイキングでは、フィロキセラの伝播ルートを実際に歩くことで、過去の人々がブドウ病害虫による災禍を乗り越えながら、ワイン醸造業とともに歩んできた地域の歴史を振り返る機会となっていた。景観とは、生活や生業といった人間の営みと土地との関係性が表出した視覚的形象だといわれる。しかしながら、現実には目に見えている風景からその関係性を読み取ることは、さほど容易なことではない。景観を理解し、より深く知るためには、実は景観を成り立たせている「見えないもの」を理解することが必要なのではないか。景観に対する理解が深まり、その価値や魅力に気づけば、自ずと愛着も湧き、それを大切にしようという意識も生まれる。景観保全を考える上で重要なことは、物理的表層としての、つまり「見え」としての景観を維持していくことではなく、これまで蓄積されてきた目には見えない人と土地との関係性を、現代を生きるわれわれがしっかりと認識し、それを後世に伝えていくことではないか。当事者たちは無意識的なものかもしれないが、今回取り上げた3つの事業者はまさにそれを体現しているともいえる。

景観の顕在化の方法として、ハイキングやサイクリングといった観光が有効な手段であることは、すでに上述の事業者たちの活動からも明らかであろう。観光が、広い意味での「学び」の場であることはIで指摘した通りであるが、今回改めて確認されたことは、観

光という行為を通じて、土地や景観について“楽しみながら”学べることの重要性である。たとえば、電動自転車を用いることで、大人から子供まで、あるいは体力の有無にかかわらず、気軽にサイクリングを楽しめるBurricletaや、家族や友人などの親しい人たちと、あるいは単独でも参加できるCal Feruのハイキングなど、幅広い客層に対して無理のない「入り口」が設定されていることは、景観に触れる機会が人々に広く開かれているという点で、重要な意味をもつ。さらに、気の知れた人たちとともに素晴らしい景観を楽しむつつ、“楽しみながら”学び得た知識や経験は、よい思い出・楽しい体験として記憶にも残りやすい。それが、稀にしかないイベント性のある機会であれば、なおさらであろう。このように、「景観をともにみる・経験する」という行為が、地域の共有像としての景観の姿形を再確認し、その望ましいあり方について考えるきっかけとなるのならば、景観に対する市民意識の向上を促す手段として、観光の果たす役割は大きいといえるのではないか。

景観保全とは、たんに上から法的枠組を被せて規制をしたり、政策を講じたりするだけで成しうるものではないし、一部の住民による開発への反対運動によっても実現するものではない。景観をつくるアクターとして、まずは市民の意識を少しずつ育てていくことが重要である。それには、人々が景観という対象についてよく知り、その価値や魅力を（再）認識するプロセスが必要となる。パナデスにおけるこれらの観光の取組は、地域の共有財産としてのブドウ畑の景観を顕在化させ、その価値や魅力に触れさせる「気づき」の場を提供している点で、大きな意義をもっている。

注

- 1) 「生活景」については、日本建築学会（2009）による概念定義や事例研究の蓄積がある。
- 2) ここでいうパナデスとは、行政上アル・パナデス、バシユ・パナデス、ガラフの3つの郡から構成される地理的領域を指す。なお、その領域と、ワイン産地としてのパナデスの領域（DOパナデスの生産地域）とは厳密には一致しない。
- 3) パナデスにおけるワイン醸造業の展開については、竹中・齊藤（2010）を参照されたい。
- 4) ライセンス・ビジネス方式では、フランチャイズ方式と同様に、同一ブランドのもとで事業展開するものの、同方式とは異なり、開業時に最低限のノウハウが提供されるのみで、その後の継続的な指導や管理がないのが特徴的である。したがって、各オーナーの自由裁量の余地は大きく、またロイヤルティ等の支払いも発生しない。
- 5) ここでは、電動自転車そのものに言及するときには小文字から始まるburricletaを、事業者とそのプロジェクトを指すときには大文字から始まるBurricletaを用い、表記を使い分けることにした。
- 6) たとえば、パナデス・ガラフセンターではワイン産地であるパナデスの特性を活かして、ブドウの収穫体験やワイナリー訪問とburricletaでのサイクリングとを組み合わせたイベントを随時開催している。

文献

- 神吉紀世子（2011）：文化的景観の重層的な価値とその継承－熊野古道に見る景観保全への地域づくりアプローチ。所収：日本建築学会編『未来の景を育てる挑戦－地域づくりと文化的景観の保全』，pp.134-144.
- 小泉武栄（2011）：ジオエコツーリズムの提唱とジオパークによる地域振興・人材育成。『地学雑誌』，120-5，pp.761-775.
- 小浦久子（2008）：『まとまりの景観デザイン－形の規制誘導から関係性の作法へ』，学芸出版社，238p.
- 齊藤由香（2011a）：スペイン・カタルーニャ自治

- 州における景観政策の新展開－「景観目録」の作成に注目して－。『金城学院大学論集』（社会科学編），7-2，pp.13-31.
- 齊藤由香（2011b）：ブドウ畑の景観の価値づけと保全－スペイン・カタルーニャ自治州アル・パナデス郡における景観憲章の制定－。『金城学院大学論集』（社会科学編），8-1，pp.50-69.
- 齊藤由香（2012）：景観を通じて結ばれる地域－スペイン・カタルーニャ自治州アル・パナデス郡における景観憲章の取り組み－。小林浩二・大関泰宏編著『拡大EUとニューリージョン』，原書房，pp. 265-277.
- 敷田麻美編（2008）：『地域からのエコツーリズム－観光・交流による持続可能な地域づくり』，学芸出版社，205p.
- 竹中克行・齊藤由香（2010）：『スペインワイン産地の地域資源論』，ナカニシヤ出版，313p.
- 日本建築学会（2009）：『生活景－身近な景観価値の発見とまちづくり』，学芸出版社，286p.
- Council of Europe (2000): *European Landscape Convention*. <<http://conventions.coe.int/Treaty/en/Treaties/Html/176.htm>> [2015年10月30日閲覧]



1-1：ViciclingのAlbert氏。彼自身も自転車に乗りながら、ガイドとしてツアーを誘導する。



1-2：かつて収納庫として使われていた石造り (pedra seca) の小屋。背後には階段状の耕地とそれを支える石組みがみえる。



1-3：ルート途中のブドウ畑に立ち止り、ブドウの生育サイクル、剪定など、ブドウ栽培について解説を受ける。



1-4：サン・パウ・ドウルダルの中心広場に立つ「桃の市」。スピラッツはブドウのほか、上質な桃の産地としても知られる。



1-5：サン・パウ・ドウルダル近郊のブドウ畑。背景のイトスギはこの地域に典型的な地中海樹木の1つ。



1-6：ワイナリー（Eduald Massana）にて。ツアーの最後にはパナデス名産のカバ（発泡性ワイン）の試飲を楽しむことができる。

写真1 Viciclingによるサイクリングツアー（2012年9月）



2-1：Burricletaのパナデス・ゴルフセンターにて。レンタル用の電動自転車（burricleta）約30台を常備している。



2-2：burricletaの後部には、背に荷をつけたロバをイメージして、藁で編んだカゴが備え付けられている。



2-3：ヘルメットも貸出可。農村景観に合うようにヘルメットも帽子型のデザインのもの揃えている。



2-4：burricletaに搭載されているGPS（右）。



2-5：ルートのもく的地となっているEls Pèlegs。



2-6：ルート途中にみえるパナデスの農業景観。ブドウ畑のなかにマジア（伝統的農村家屋）が点在している。



3-1：朝9:00, サン・サドウルニ・ダノヤにある Cal Feruの店の前にて。受付を済ませ、出発を待つハイキング参加者たち。



3-2：ガイド（右）の説明に耳を傾ける参加者たち。彼らの関心は高く、ハイキング中、ガイドへの質問は絶えない。



3-3：Vilarnau（ワイナリー）にて。ステンレスタンクから直接抽出されたカバのモスト（原酒）の試飲を楽しむ。



3-4：ブドウ畑を眺めながらの散策。家族連れ、友人との参加が多く、親しい人との会話を楽しみながら歩く。



3-5：Juve y Camps社のブドウ畑。背後にはカタルーニャのシンボル・モンセラット山が薄っすらと見える。



3-6：最後の訪問先ワイナリー（Ravenós i Blanc）にて。カバを堪能しつつ、他の参加者との交流も深まる。